

第20回山階芳麿賞記念シンポジウム

コウノトリ野生復帰と 生物多様性の保全

平成30年9月29日（土） 13：30～16：00

東京大学農学部 弥生講堂

主催 公益財団法人 山階鳥類研究所

共催 朝日新聞社 後援 我孫子市

目次

プログラム	2
山階芳麿賞記念シンポジウムにあたって	
(公財) 山階鳥類研究所 総裁 秋篠宮文仁	3
第 20 回山階芳麿賞 贈呈理由	
山階芳麿賞選考委員長 / (公財) 山階鳥類研究所 所長 奥野卓司	4
受賞者の略歴	5
受賞のことば 山階芳麿賞受賞の栄誉	
兵庫県立大学教授 / 兵庫県立コウノトリの郷公園統括研究部長 江崎保男	6
講演要旨	
日本の人と自然～野生復帰からみえてくるもの～	
兵庫県立大学教授 / 兵庫県立コウノトリの郷公園統括研究部長 江崎保男	7
湿地とコウノトリ～大規模野外研究の成果～	
兵庫県立大学教授 / 兵庫県立コウノトリの郷公園研究部長 佐川志朗	8
コメンテーター	
国立研究開発法人土木研究所 水環境研究グループ長 萱場祐一	9
山階芳麿賞とは	10
山階鳥類研究所の紹介	11
ご支援のお願い	12

プログラム

開会

ごあいさつ (公財) 山階鳥類研究所理事長 壬生基博

ごあいさつ 朝日新聞社 上席執行役員 CSR 担当 町田智子

贈呈理由 山階芳麿賞選考委員長 / (公財) 山階鳥類研究所 所長 奥野卓司

シンポジウム

コウノトリ野生復帰と生物多様性の保全

■講演■

●日本の人と自然～野生復帰からみえてくるもの～

兵庫県立大学教授 / 兵庫県立コウノトリの郷公園統括研究部長 江崎保男

●湿地とコウノトリ～大規模野外研究の成果～

兵庫県立大学教授 / 兵庫県立コウノトリの郷公園研究部長 佐川史朗

●コメンタリー

国立研究開発法人土木研究所 水環境研究グループ長 萱場祐一

(休憩)

■質疑応答■

江崎保男・佐川志朗・萱場祐一

閉会

司会 (公財) 山階鳥類研究所
広報コミュニケーション・ディレクター
平岡 考

山階芳麿賞記念シンポジウムにあたって



(公財) 山階鳥類研究所 総裁

秋篠宮文仁

公益財団法人山階鳥類研究所は、1992年に財団設立から50周年を迎えました。その記念の年にあたり、創立者である山階芳麿の名を冠した「山階芳麿賞」を創設し、鳥学ならびに鳥類保護に顕著な功績があった方を表彰することにいたしました。

本年、20回を迎えた山階芳麿賞は、兵庫県立大学大学院地域資源マネジメント研究科長、兵庫県立コウノトリの郷公園統括研究部長の江崎保男教授にお贈りすることになり、去る7月2日に贈呈式が行われました。受賞された江崎教授に心からお祝いを申し上げます。

江崎教授は、鳥類の生態学について多岐にわたる業績を残されました。また保全の面では、日本で1971年に野生絶滅したコウノトリの野生復帰に大きな貢献をしてこられました。さらに、土木工学と生態学の融合を目指した応用生態工学の提唱と発展にも力を尽されました。

本日は江崎教授への山階芳麿賞贈呈を記念して、シンポジウム「コウノトリ野生復帰と生物多様性の保全～鳥類生態学と応用生態工学の出会い～」を開催いたします。コウノトリの保護は、山階鳥類研究所の創立者である山階芳麿が、1955年、当時の坂本勝 兵庫県知事に、コウノトリを護ることを強く呼びかけたことがきっかけとなり組織的に始まったものです。そのことに思いを馳せる時、今日このように、江崎教授をはじめとする関係者のご尽力によって、コウノトリが日本の野外で復活しつつあることには大変感慨深いものがあります。

コウノトリの野生復帰は単にコウノトリという種の保全のみにとどまらず、里地の生物多様性の復元と地域社会の活性化を目指して行われています。本日は、江崎教授をはじめ、これまでに関係してこられた方々の研究と実践をわかりやすく紹介していただきます。皆様にとってこのひとときが、コウノトリを中心とした生物の多様性や地域社会、そして応用生態工学への理解を深める契機になりますことを願っております。

終わりに、江崎教授ならびにご関係の方々、そして教授の薫陶をうけられた方々の研究と実践が今後ますます発展し、さらなる活躍をされますことを祈念し、私の挨拶といたします。

山階芳麿賞 贈呈理由



山階芳麿賞選考委員長
(公財) 山階鳥類研究所 所長

奥野卓司

江崎保男氏は、多種多様な鳥類・鳥類群集などについて多岐に亘る生態学的研究を行いました。この中で特にめざましいものはオオヨシキリの研究で、中でも西欧の研究者達と競った、資源防衛型一夫多妻の成立機構論争に決着をつけた研究は、イギリス生態学会の伝統ある学会誌に掲載され、かつJ・R・クレブスらの権威ある教科書に引用され続ける日本人研究者による数少ない論文であり、日本の鳥類研究の水準の高さを世界に知らしめました。

保全の面では、江崎氏はコウノトリの野生復帰において大きな貢献をされました。兵庫県立コウノトリの郷公園の設立に尽力した後、同公園研究部長として、研究面では蓄積された野外データの論文公表と国際発信に努める一方、研究で培った深い生態学的素養と、自ら執筆したランドデザインに基づき実践指揮をとると共に、多様な地元ステークホルダー間の調整を行う事により、野生復帰を成功に導いてられました。江崎氏が主導して兵庫県立大学に設置された大学院地域資源マネジメント研究科は、コウノトリを地域資源と捉えて、鳥類の保全を地域社会の活性化につなげる企てに学問的な裏付けを与えるものです。

江崎氏はまた、防災のための土木工事が生物多様性に悪影響を与えるという、従来しばしば見られた状況を克服するために、土木工学と生態学の融合を目指した、応用生態工学の提唱と発展にも尽力されました。実際に土木工学的な視点で捉えた環境と鳥類の生態を結びつける研究を行うとともに、応用生態工学会の幹事長として組織運営に尽力し、現在は同学会の会長に就かれています。

また江崎氏は2010年から2013年までの4年間、日本鳥学会会長をつとめ、2012年に100周年を迎えた同学会の100周年記念事業の実施を主導しました。さらに、従来から多くの鳥類研究者を育てるとともに、アマチュアの指導にも力を注いでられました。

このように江崎氏は、生態学で目覚ましい研究業績を上げるとともに、保全上も重要な仕事をされ、社会との結びつきの点からも有意義な活動を行ってられました。これらの功績をたたえて、山階芳麿賞選考委員会は江崎保男氏に山階芳麿賞を贈ることがふさわしいと判断いたしました。

受賞者の略歴



江崎保男 (えざき やすお)

【生年月日】 1951年12月12日大阪府生まれ

【専門】 動物生態学

【学歴・職歴】

1976年 京都大学理学部卒業

1981年 京都大学大学院理学研究科博士課程研究指導認定

1985年 同 修了(京都大学理学博士)

1989年 兵庫県教育委員会指導主事(自然系博物館設立準備室)

1992年 姫路工業大学自然・環境科学研究所助教授

兼 人と自然の博物館主任研究員

1999年 同 教授 兼 人と自然の博物館主任研究員

2001年 同 教授 兼 人と自然の博物館自然・環境マネジメント研究部長

2003年 兵庫県立大学自然・環境科学研究所教授 兼 同上

2006年 兵庫県立大学自然・環境科学研究所所長・教授

兼 兵庫県立人と自然の博物館次長(2010年まで)

2006年 兵庫県立大学環境人間学研究科教授(兼担, 2016年まで)

2010年 兵庫県立大学自然・環境科学研究所次長・教授

兼 兵庫県立コウノトリの郷公園研究部長

2014年 兵庫県立大学大学院地域資源マネジメント研究科研究科長・教授

兼 兵庫県立コウノトリの郷公園統括研究部長 現在に至る

【主な著書】『動物群集の様式』(C・エルトン(著)・共訳・1990・思索社) ◆ 『水辺の環境保全ー生物群集の視点から』(共編・1998・朝倉書店) ◆ 『近畿地区鳥類レッドデータブックー絶滅危惧種判定システムの開発』(共編・2002・京都大学学術出版会) ◆ 『小林桂助コレクション鳥類標本目録』(共編・2006・兵庫県立人と自然の博物館) ◆ 『土木工学と生態学の壁はとりのぞかれたか?』(編・2007・応用生態工学会) ◆ 『生態系ってなに?』(2007・中公新書) ◆ 『自然を捉えなおす』(2012・中公新書) ◆ 『ダム湖の環境保全III.』(共編・2015・京都大学学術出版会) ◆ 『コウノトリ野生復帰の手引書』(共編・2018・コウノトリの個体群管理に関する機関・施設間パネル)

【主な学会・社会活動】日本鳥学会会長(2010～2013) ◆ 応用生態工学会会長(2018～) ◆ 関西自然保護機構理事(1996～2002)

受賞のことば

山階芳麿賞受賞の榮譽

兵庫県立大学教授 / 県立コウノトリの郷公園統括研究部長

江崎保男

第20回の山階芳麿賞をいただき、この上なく光栄です。山階芳麿博士に直接お目にかかる機会をもたなかったのは誠に残念なことではありますが、明白に日本の鳥類学発展の礎を築かれた方であるからです。またお元気な頃の写真を拝見しますと、山階博士が有しておられた科学・学術に対する真摯な姿勢とともに、深いお心もちを感じ取ることができるからです。

生前に山階博士がなされたことに思いを馳せると、鳥類の保護・保全における数々の業績はもちろんのこと、発刊後すでに80有余年を経ている「日本の鳥類と其生態」がすぐ頭に浮かびます。わが国の大切な「古典 classics」であることは言うまでもありませんが、そこには、日本に生息する各種鳥類の生態に関する定量情報がきわめて科学的に記載されています。そこで、日本の鳥類、なかでも調査が困難で、生態学的研究がほとんど行われてこなかった種に関する科学的情報を得ようとすれば、この書に依拠する必要がある、そこには期待を裏切ることなく、求めるものが常に存在しています。

さて今回、授賞理由には3つの点をあげていただきました。「各種鳥類の生態学的研究」「コウノトリの野生復帰」、そして「応用生態工学」です。最初のことについては、若いころ、英国のDavid Lack博士による分厚い名著に必死で取り組んだ日々を思い出します。そこには汲んでも汲み切れないほどの深い思索が盛り込まれており、これがオオヨシキリを材料とする資源防衛型一夫多妻の成立メカニズムの解明につながりました。

次に、コウノトリについては、誠に僥越ながら、ここにおいてこそ「山階博士とご縁をもてた」との感慨を呼び起こすものがあります。ご存知の方も多いかと思いますが、20世紀のなかば、絶滅に瀕していた日本のコウノトリの保護は、山階博士が当時の兵庫県知事・坂本勝氏に、このことを強く提言されたことに始まりました。そして私がたまたま兵庫県及び県立大学に職をえたことにより、コウノトリとのかかわりが始まった次第であります。

そして応用生態工学ですが、私が研究開始当初からこだわり続けてきた「動物のハビタット(生息場所)」という生態学的概念を理論的に発展させる場として、土木工学の研究者との実り多い日々をもたらしてくれました。

最後に、山階芳麿賞受賞の榮譽に浴するにあたって、これまでお世話になった諸先輩、同僚、そして、講演・活字・対話を通して多くのものごとを私に与えて頂いた数多くの方々に厚く御礼を申し上げます。

講演要旨

日本の人と自然～野生復帰からみえてくるもの～

兵庫県立大学教授 / 県立コウノトリの郷公園統括研究部長

江崎保男

コウノトリの野生復帰は、2005年9月に兵庫県立コウノトリの郷公園（以下、郷公園）が飼育下にあった5羽を、野外にリリース（放鳥）したことに始まる。2007年には郷公園が位置する豊岡盆地での野外繁殖が始まり、2017年の繁殖終了時には、リリース個体と野外巣立ち個体、これらに大陸から飛来した野生個体2羽を加えた198個体のうち119個体（60%）の生存が確認されている。また2017年には、豊岡を含む北近畿以外では初となる、徳島県鳴門市での巣立ちが始まり、コウノトリ野生復帰ランドデザイン（2011年）で中期目標にあげた「メタ個体群構造の構築」への大きな一歩が踏み出された。

リリース個体と野外巣立ち個体は色足環で個体識別されているので、再導入から10数年を経た現在、兵庫県立大学と郷公園の共同研究により、Breeding Biology（一腹卵数・抱卵日数・育雛日数等の繁殖基礎情報）はもとより、本種の興味ある生態が明らかになっている。たとえば、社会構造の基本が「つがいのなわばり」であること、成熟に3年を要するため3歳未満の若鳥が個体群の半数を占めていること、独身の成熟雌雄を加えると独身フローターの割合が約8割に達すること、などである。いっぽう、これまで繁殖に成功したつがいに離婚例はないので、配偶システムは「強い絆の一夫一妻」であり（現時点での最長は10年）、このことに起因して、配偶者選択が非常に厳しいことが分かっている。またこれらに関連して、なわばり内に周年とどまることを許される「居候」の存在と実態も明らかにされてきた。

ところで、ここまでの野生復帰の成功は「官民学の連携」によってもたらされたと言って良いだろう。民との連携は、兵庫県が開発した、無農薬のコメ栽培技術「コウノトリ育む農法」に象徴されるが、この農法の普及過程では、豊岡市との連携が大きな役割を果たすとともに、農家の生物多様性への理解が進展し、このことが野生復帰を大いに後押しした。また、淡水魚の水田への遡上・産卵を可能にする水系の連続性確保には、国・県（国交省・県土整備部）との連携による「環境整備」が必須であり、このことが、食糧問題解決を内包しながら、今後の国内陸域における生物多様性保全の中核をなすと考えられる。

私が野生復帰事業を進めるにあたって基盤としてきたのは、動物生態学における「ハビタット（生息場所・生息場）の概念・理論」であり、このことは、40数年前、研究生生活の最初に手掛けた「オオヨシキリの一夫多妻社会の解明」以来、一貫している。本講演では、鳥類のハビタット研究と野生復帰の実践を通じて明らかになった「日本の人と自然の本質」に言及する予定である。

講演要旨

湿地とコウノトリ～大規模野外研究の成果～



兵庫県立大学教授 /
兵庫県立コウノトリの郷公園研究部長

佐川志朗

コウノトリは湿地に生きる鳥です。みなさんは湿地というと、ヨシ原が地平線まで広がる北海道の釧路湿原や高原に位置する尾瀬のお花畑などが頭に浮かぶかもしれませんが。しかしここでいう湿地とは、我々がみなれたどこか懐かしい風景である水辺や田園が当てはまります。もう少し詳しく説明すると、水辺は水と土砂により形成・維持される河川内の静水域や浅水域、田園は田んぼやビオトープのような人工湿地がこれにあたります。

それではなぜコウノトリはこのような湿地を好むのでしょうか。それは、大型の肉食性鳥類であるためたくさんの餌動物を効率よく捕えることができる場所がいたる所に必要だからです。湿地にはフナ、ナマズ、タモロコといったコイ科魚類の他、カエル類、ゲンゴロウ類などの多様な水辺の生き物が侵入し繁殖しています。また湿地にはバッタ類やクモ類、ヘビ類などの陸生動物も多く生息しています。現在、野外には140羽のコウノトリが生息していますが（2018年7月13日現在）、巣をかまえる場所には必ず湿地が広がり、そこでは四季をとおして餌をとる行動が確認され、39種類もの動物を採餌していたことがわかっています。

コウノトリの野生復帰事業は、兵庫県但馬地域の円山川流域で始まり、ここではコウノトリが十分に餌をとれるようにと多くの湿地整備事業が行われてきました。水辺の生き物の生息場として、河川内にワンドやタマリといった水溜りや水際の水生植物帯を造る試みや、カエル類やトンボ類の産卵や上陸がスムーズにできるように、早期湛水や中干延期といった田んぼの水管理方法の変更、さらには川と田んぼ間を水辺の生き物が往来できる工夫（水域連続性の確保）などがこれに該当します。そして、コウノトリの飛来が全国に拡大した現在、但馬地域で行われた事業をモデルに各地で環境整備事業が進んでいます。

江崎先生と私を含める研究チームは、一度絶滅したコウノトリが野外に再び放たれた2005年以降に、様々な生態学的な研究を行ってきました。野外のコウノトリには足環および衛星発信機を装着してきたために、個体および全国レベルでの位置情報をおさえることができ、大規模な野外研究を遂行することができたのです。本シンポジウムではこれらのフィールドデータをもとに、再導入後のコウノトリの採餌生態と実施されてきた環境整備事業の内容およびその評価について紹介したいと思います。

コメンテーター



国立研究開発法人土木研究所 水環境研究グループ長

萱場祐一

人口減少、高齢化が進み、さらには気候変動に起因すると思しき災害が頻発している。暗いニュースが社会を覆い、伏し目がちな毎日を送る中で、コウノトリは我々に大空を見上げる機会を与えてくれる希望である。あの飛翔する姿に感銘を受ける人は多いだろうし、野生復帰の個体数の増加は自然再生が着実に進んでいることを実感できる数少ないバロメーターでもある。しかし、野生復帰がもたらす意義はこれに留まらないだろう。広い生息地、豊かな餌資源を国土スケールで必要とするコウノトリは、湿地や農地のグリーンインフラとしての機能を考えるきっかけにもなるし、この中には、土地利用の在り方、そして、防災・減災機能の側面も含まれるだろう。すなわち、国土管理の在り方との関係の中でコウノトリの野生復帰も考えられるのかも知れない。これは、応用生態工学の新しい視座となり、様々な学問領域の協働を産み出すきっかけになるだろう。

山階芳麿賞とは

山階芳麿賞とは

● 山階芳麿賞は、財団創立 50 周年にあたる 1992 (平成 4) 年に、我が国の鳥類学の発展と保護活動に寄与された個人あるいは団体を顕彰するために設けられました。

● 山階鳥類研究所所長を委員長とする本賞選考委員会で贈呈対象者(個人または団体)を選考します(委員会の構成は右下欄を参照)。

● 受賞者には、山階鳥類研究所総裁、秋篠宮文仁親王殿下から表彰状と記念メダルが贈られます。記念メダルは、表に山階芳麿博士の肖像、裏に本研究所が新種記載した沖縄島の固有種、ヤンバルクイナのレリーフをあしらい、受賞者の氏名が受賞年とともに刻印されます。また、第 12 回(2003 年)の受賞者からは、さらに副賞として「朝日新聞社賞」(賞金 50 万円と盾)が贈られることになりました。

● 歴代受賞者

第 1 回 羽田健三[†](信州大学名誉教授)、第 2 回 松山資郎[†](山階鳥類研究所顧問)、第 3 回 中村司(山梨大学名誉教授)、第 4 回 黒田長久[†](山階鳥類研究所所長)、第 5 回 中村登流[†](上越教育大学名誉教授)、第 6 回 正富宏之(専修大学北海道短期大学教授)、第 7 回 樋口広芳(東京大学大学院教授)、第 8 回 山岸哲(京都大学大学院教授)、第 9 回 藤巻裕蔵(帯広畜産大学教授)、第 10 回 小城春雄(北海道大学大学院教授)、第 11 回 中村浩志(信州大学教授)、第 12 回 石居進(早稲田大学名誉教授)、第 13 回 由井正敏(岩手県立大学教授)、第 14 回 長谷川博(東邦大学教授)、第 15 回 立川涼[†](愛媛大学名誉教授)、第 16 回 森岡弘之[†](国立科学博物館名誉研究員)、第 17 回 日本イヌワシ研究会、第 18 回 橘川次郎^{†*}(クイーンズランド大学名誉教授)、小西正一^{*}(カルフォルニア工科大学名誉教授)、第 19 回 上田恵介(立教大学名誉教授)

いずれも受賞当時の役職、[†]故人、^{*}特別賞



山階芳麿賞のメダル



表：山階芳麿博士の肖像
裏：ヤンバルクイナのレリーフ
受賞年と受賞者の氏名が刻印される

山階芳麿博士



山階芳麿博士は、1900(明治 33)年 7 月 5 日、山階宮菊麿王の第二子として誕生しました。幼い頃から鳥に興味を持ち、陸軍士官学校を経て東京帝国大学(現東京大学)理学部動物学科選科に入学、動物学の基礎を学びました。同選科を 1931(昭和 6)年に修了、1932(昭和 7)年に山階鳥類研究所の前身である山階家鳥類標本館を設立、鳥類の研究に没頭し、アジア・太平洋地域の鳥類標本の収集にも努めました。1939(昭和 14)年から、北海道帝国大学(現北海道大学)の小熊捍教授の指導で研究を行い、1942(昭和 17)年「鳥類雑種の不妊性に関する研究」で同大学から理学博士号を取得しました。その後、鳥類の染色体の研究に取り組み、染色体を用いる方法を鳥類の分類に導入し、この成果を 1949(昭和 24)年に「細胞学に基づく動物の分類」として出版しました。この研究は、主観的な形態分類に代わる客観的な分類法として国の内外から高く評価され、これにより、翌 1950(昭和 25)年、日本遺伝学会賞を受賞しました。また、研究のみならず鳥類保護にも熱意を注ぎ、日本鳥学会会頭、日本鳥類保護連盟会長、国際鳥類保護会議副会長、同アジア部会長などの役職を歴任しました。1977(昭和 52)年、ノーベル賞受賞者 K. ローレンツ博士などわずか数人に与えられたジャン・デラクール賞を受賞、翌 78(昭和 53)年には「世界の生物保護に功績があった」としてオランダ王室から第 1 級ゴールデンアーク勲章を受章しました。1989(平成元)年 1 月 28 日没、88 歳。主要著書に「日本の鳥類と其生態」(第 1 巻：1933、第 2 巻：1941)、「世界鳥類と名辞典」(1986)他、論文多数。

山階芳麿賞選考委員

委員長：奥野卓司((公財)山階鳥類研究所所長)

委員：石居進(早稲田大学名誉教授)、井田徹治(共同通信社編集委員兼論説委員)、上田俊英(朝日新聞編集委員)、牛山徹也((株)NHK エンタープライズ自然科学番組部・エグゼクティブ・プロデューサー)、岡安直比(NPO 法人 UAPACAA 国際保全パートナーズ代表理事/京都大学野生動物研究センター特任教授)、尾崎清明((公財)山階鳥類研究所副所長)、山岸哲((公財)山階鳥類研究所理事・名誉顧問、大阪市立大学名誉教授)、渡辺茂(慶応義塾大学文学部名誉教授)五十音順

山階鳥類研究所の紹介

山階鳥類研究所の歴史と概要

山階鳥類研究所は、山階芳麿博士（1900～1989）が1932（昭和7）年に私費を投じ、東京渋谷南平台の山階家私邸内に建てた鳥類標本館が前身です。1942（昭和17）年に文部省（当時）から許可を得て、財団法人として発足しました。

その後、建物が老朽化し手狭になったことから、1984（昭和59）年、千葉県我孫子市高野山の手賀沼畔に移転し、現在に至っています。2012（平成24）年4月、公益法人制度改革に伴い、公益財団法人に移行しました。また1986（昭和61）年からは、秋篠宮文仁親王殿下を総裁としてお迎えしています。

現在、山階鳥類研究所は以下の3つの部門と研究所長直属スタッフで構成されています。日本最多の鳥類標本と文献を所蔵し、鳥類標識調査を長年実施している機関として、外部の鳥類研究者や関連分野の研究者、アマチュアの方々との連携をはかりながら鳥類全般に関する科学的研究を行っています。



東京渋谷南平台の旧研究所



千葉県我孫子市の現研究所

自然誌研究室：

鳥類標本約7万点と図書資料約4万点の維持管理とデータベース化、さらなるコレクションの充実を目指した収集を行っています。また、これらの資料を用いた鳥類に関する基礎的なデータの作成や研究も行っています。特に近年では、X線CTを用いて標本の3次元形態をデジタル化・アーカイブ化する研究や、DNAを用いた鳥類の系統・進化・分類に関する研究に力を入れています。

保全研究室：

鳥類の渡り経路や寿命の解明、環境の長期的モニタリングなどの視点から環境省委託の鳥類標識調査や海鳥の繁殖状況調査を行うほか、鳥類標識センターとして国内外の調査者の育成、標識データのとりまとめに取り組んでいます。アホウドリの新繁殖地への誘致やヤンバルクイナの生態研究など、希少鳥類の保全のための調査研究を行っています。

研究所長直属スタッフ：

- ・コレクション・ディレクター
図書資料などの整理を推進するとともに文化誌的研究にも寄与する業務を行っています。
- ・広報コミュニケーション・ディレクター
ニュースレターの発行やウェブサイトの作成・更新など、研究所と外部の方々をつなぐ業務を行っています。

事務局：

財団の活動を支えてくださる賛助会員やご寄付の窓口業務、財団運営に係わる事務全般を行っています。

理事長、所長を含め人員数は23名で、そのうち15名の研究員・専門員がそれぞれの部門で研究業務にあたっています。鳥類学専門誌「山階鳥類学雑誌」を年2回、ニュースレター「山階鳥研 NEWS」を隔月発行して、鳥類学と地球環境保全の普及啓蒙を行っています。現在、東邦大学大学院、東京農業大学大学院、帝京科学大学大学院と連携大学院協定を結んで、相互に研究協力しています。また、我孫子市鳥の博物館と、所蔵資料や研究成果の展示、講演会や共同研究などを通じて連携しています。

ご支援のお願い

山階鳥類研究所は、日本、アジアをはじめとした膨大な数の鳥類標本、図書資料を所蔵し、内外の研究者にその情報を提供してきました。また、鳥類全般の科学研究により国際的にも評価されており、ヤンバルクイナの新種記載、コウノトリやトキの保護への参画、アホウドリの保護・増殖事業、標識をつけて放鳥することにより鳥の生態や渡りの経路を調べる標識調査など、多くの活動を行っております。私たちはこれらの活動を通じ、生物多様性の維持、地球環境の保全にも貢献しています。

山階鳥類研究所では、このような活動を支えてくださるためのご寄附を随時お受けしているほか、賛助会員を広く募集しております。賛助会員の方には、山階鳥類研究所の活動をお知らせする「山階鳥研 NEWS」（年 6 回発行）や、学術誌「山階鳥類学雑誌」（年 2 回）をお届けし、随時開催するシンポジウムなどのイベントのご案内を差し上げるほか、親睦を図る目的で賛助会員の集いを随時開催しています。

賛助会員の方々から頂戴する賛助会費は、上記のような研究活動や標本・図書資料の収集・維持管理などに使われます。日本の鳥類学の発展と鳥類の保護、そして地球環境の保全をめざす私どもの活動を支えてください。皆様のあたたかいご支援をお願いいたします。

賛助会のご案内

○ 法人賛助会員

（年会費 1 口 5 万円） 「山階鳥研 NEWS」と学術雑誌「山階鳥類学雑誌」 をお送りします。

○ 個人賛助会員

（年会費 1 口 1 万円） 「山階鳥研 NEWS」もしくは「山階鳥類学雑誌」のいずれかご希望のものをお送りします。

（年会費 1.5 口 1 万 5 千円） 「山階鳥研 NEWS」と「山階鳥類学雑誌」の両方をお送りします。

本日は入会申込みの窓口を設けています。ぜひこの機会にご入会をお願いします。また、賛助会員申込書（個人・法人）および詳しい資料をお送りいたしますので、入会をご希望の方は下記へご連絡ください。

山階鳥類研究所では、賛助会員のほかにご寄附も募っておりますので、よろしく願いいたします。

[入会申込み・資料請求の宛先]

〒 270 - 1145 千葉県我孫子市高野山 115 （公財）山階鳥類研究所・事務局

TEL : 04-7182-1101 FAX : 04-7182-1106

E-mail : kaiin@yamashina.or.jp URL : <http://www.yamashina.or.jp>

※ 山階鳥類研究所は公益財団法人です。

当財団に対する寄附金及び賛助会費は税制上の優遇措置の対象となります。



【三種のカワセミ】

山階鳥類研究所設立時に玄関に飾られたステンドグラスです。

左から旧北区のアカショウビン、東洋区のヤマショウビン、オーストラリア区のシロガシラショウビンで、広くアジアや太平洋産鳥類を研究する目標を表徴したものです。「山階鳥類学雑誌」の表紙や「山階鳥研 NEWS」の題字にも使われており、山階鳥類研究所のシンボルマークとなっています。

第 20 回 山階芳麿賞記念シンポジウム コウノトリ野生復帰と生物多様性の保全

発行日	2018 年 9 月 29 日
編集・発行	公益財団法人 山階鳥類研究所 千葉県我孫子市高野山 115
印刷	NECマネジメントパートナー(株)

